

教員の総合業績(基礎資料)調査 氏名 (岡本 誠)

1 研究業績

1) 著書・論文・学会発表・作品など (2001 から 2007.3 まで)

例：(欧文の場合は、原文 **alphabet** で記入してください)

#全著者あるいは作者名 (自己にアンダーライン、単著の場合はアンダーライン不要)

&著書、学術論文又は作品の名称

\$発行所 (総頁数)、発表雑誌又は発表学会 (号・巻・pp・年月)、展覧会 (場所・期間) などの名称

さらに、特別講演・シンポジウム (招待講演)・一般講演など (地方支部会・全国大会・国際会議) の別

註：学会・展覧会など、専門分野以外の人に分りにくい場合は、できるだけその社会的位置づけ、歴史、規模などの簡潔な説明を付してください

<国内学術集会>

- ・ 岡本誠, 情報デザインの未来 (招待講演), JEITAデザイン委員会図記号委員会, 2001.
- ・ 岡本誠・石井宏一, ユーザの思考課程に基づいた情報デザイン設計方法に関する基礎研究, 日本デザイン学会 (413), 日本デザイン学会第49回研究発表大会概要集, pp18-19, 2002.
- ・ 石井宏一・岡本誠, 情報表現に関する基礎研究, 日本デザイン学会 (413), 日本デザイン学会第49回研究発表大会概要集, pp19-20, 2002.
- ・ 高木友史, 秋田純一, 伊藤精英, 小野哲雄, 岡本誠, CyARM:非視覚的モダリティによる直感的な空間認識インタフェース, インタラクシオン 2004 論文集 *IPSJ Symposium Series Vol. 2004, No.5*. pp181-182. 2004.3.
- ・ 岡本誠, 秋田純一, 伊藤精英, 小野哲雄, CyARM : 非視覚的モダリティによる「直感」のインタフェース, 日本機械学会, 2004.9.
- ・ 星貴広, 三島悠, 秋田純一, 伊藤精英, 刑部育子, 小野哲雄, 岡本誠, CyARM: 運動感覚を活用した空間認識インタフェースとその実装, インタラクシオン 2005 論文集 (*IPSJ Symposium Series Vol. 2005, No.4*), pp.57- 58, 2005.3.
- ・ 小松英寛・岡本誠, ユーザ評価におけるシナリオの生成を補助するシステム, 日本デザイン学会第52回研究発表大会, pp.134-135, 2005.6. 小松英寛・岡本誠, ユーザ評価におけるシナリオの生成を補助するシステム, 日本デザイン学会第52回研究発表大会, pp.134-135, 2005.6.
- ・ 小川貴生・岡本誠, 科学を身近に感じるDiagram, 日本デザイン学会第52回研究発表大会, pp.136-137, 2005.6.
- ・ 秋田純一・伊藤精英・小野哲雄・岡本誠, 「CyARM: 非視覚モダリティによる空間認識装置」情報処理学会論文誌, Vol.46, No. 7, pp.1693-1700, 2005.7.
- ・ 伊藤精英・岡本誠・秋田純一・小松孝徳, 「CyARM-触覚による環境探索支援装置の開発とその応用の可能性-」日本特殊教育学会第43回大会, P3-20, 2005.9.
- ・ 岡本誠, 「空間認識装置 (CyARM) の情報デザイン」, 日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号 第13巻3号, ISSN 0919-6803, pp28-35, 2006.1.
- ・ 岡本誠, シナリオを用いた情報デザイン, 日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号 第13巻3号, ISSN 0919-6803, pp72-73, 2006.1.
- ・ 西大輔・岡本誠, Hint CBS : 画像ヒント提示型発想支援ソフトウェア, インタラクシオン 2006, 2006.3.
- ・ 小松英寛・岡本誠, Scenario Based Designを用いた国際ワークショップ, 日本デザイン学会第53回研究発表大会, pp.430-431, 2006.6.

- ・ 小松英寛・小川貴生・刑部育子・岡本誠, Scenario Exchange Project シナリオベースドデザインを用いた国際ナショナルワークショップ, ヒューマンインタフェースシンポジウム 2006, 2006.9..
- ・ 加藤沙織・岡本誠, 視覚障害者の記憶をサポートする機器のデザイン, 福祉情報工学研究会(WIT), 2006.10.
- ・ 鈴木有吾・岡本誠・伊藤精英・秋田純一・小松孝徳・小野哲雄, CyARM-距離感の評価とウェアラブルインタフェースのデザイン-, 福祉情報工学研究会(WIT), 2006.10.
- ・ 小川 貴生・松山 克胤・岡本 誠, MIKAN globe:インタラクティブ地球地図の研究, インタラクション 2007, 2007.3.

<国際学会>

- ・ Yumiko Nagai, Takeshi Sunaga, Kiyotaka Morozumi, Makoto Okamoto, Keiko Miura, Ryuichi Shimamura, Makoto Yamazaki. Drawing the process of community construction, The 6th Asian Design International Conference, 2003.10.
- ・ Makoto Okamoto, Kouichi Ishii. Theory and practice for Media Architect –Construction of information design Theory, The 6th Asian Design International Conference, 2003.10
- ・ J. Akita, T. Takagi, M. Okamoto. CyARM: Environment Sensing Device using Non-Visual Modality, CSUN2004 International Conference on Technology And Persons With Disabilities, 2004.3.
- ・ M. Okamoto, J. Akita, K. Ito, T. Ono, T. Takagi. CyARM; Interactive Device for Environment Recognition Using a Non-Visual Modality, International Conference Proceedings Computers Helping People with Special Needs(ICCHP2004), pp462-467, 2004.7.
- ・ Makoto OKAMOTO, Junichi AKITA, Kiyohide ITO, Tetsuo ONO, See it by Hand - CyARM, VSMM2004, pp.1194-1203, 2004.11.
- ・ Kiyohide Ito, Makoto Okamoto, Junichi Akita, Tetsuo Ono, Ikuko Gyobu, Tomohito Takagi, Takahiro Hoshi, Yu Mishima, "CyARM: an Alternative Aid Device for Blind Persons," Proceedings of Conf. on Human Factors in Computing Systems 2005 (CHI2005), P-36, pp.1483-1486, 2005.4.
- ・ Junichi Akita, Kiyohide Ito, Takanori Komatsu, Tetsuo Ono, Makoto Okamoto, "CyARM: Direct Perception Device by Dynamic Touch," Proceedings of 13th Int. Conf. on Perception and Action(ICPA), H.Heft&K.L.Marsh(Eds.), Studies in Perception & Action VIII, pp. 87-90, 2005.7.
- ・ Makoto Okamoto, Junichi Akita, Kiyohide Ito, Tetsuo Ono, "See it by Hand - CyARM," Proceedings of 2nd International Conference on Enactive Interfaces (Enactive05), 2005.11.
- ・ Takanori Komatsu, Tetsuo Ono, Jun-ichi Akita, Kiyohide Ito, and Makoto Okamoto, "See it by Hand -- CyARM: Enhancing interaction ability without using visual information," Proceedings of 3rd Int. Conf. on Computational Intelligence, Robotics and Autonomous Systems (CIRAS2005), SS4B-2 (CD-ROM), 2005.12.
- ・ Tetsuo Ono, Takanori Komatsu, Jun-ichi Akita, Kiyohide Ito and Makoto Okamoto, CyARM: Interactive Device for Environment Recognition and Joint Attention Using Non-Visual Modality, Lecture Notes in Computer Science, 4061/2006, 2006 p1125-p1258.

<作品>

- ・ リアン ラムゼイ・岡本誠, ART HARBOUR, 函館, 2001.
- ・ リアン ラムゼイ・岡本誠, ART HARBOUR Documentation展, 函館, 2001-2002.
- ・ 岡本誠, 日本認知科学会サイン計画, 2001

- ・ リアン ラムゼイ・岡本誠, ART HARBOUR 2002, 函館, 2002.
- ・ リアン ラムゼイ・岡本誠, ART HARBOUR 2003, 函館, 2003.

2) 学会活動（役員・会員）、学会の組織運営、学会誌の編集委員など（平成 12-18 年度に限る）

例：

#学会などの名称

&編集委員長又は委員などの別

\$ 任務期間（年月）

註：専門分野によっては適宜変更（例えば、学会を展覧会などと記す）・追加説明を付してください できれば展覧会・学会などについても社会的位置付け、歴史、規模などの簡潔な説明を添えてください

- ・ 日本デザイン学会会員
- ・ ヒューマンインタフェース学会会員
- ・ 特殊教育学会会員
- ・ デザイン学会情報デザイン研究部会、設立委員（2001）
- ・ 日本デザイン学会第 49 回研究発表大会 オーガナイズドセッションオーガナイザー（2001）
- ・ 日本デザイン学会 評議員（2006.1〜）
- ・ 人間中心設計推進機構 評議委員（2005〜）

3) 研究費獲得状況（未来大学外からの財源）（科学研究費、財団助成金、委任経理金など（平成 12-17 年度に限る）

例：

#平成 12-(13)年度

&財源、たとえば科学研究費補助金

\$ 研究課題名

%代表者、分担者の別、研究課題参加者数、あるいは〇〇研究所との共同研究（相手機関の協同研究者数など）

¥研究経費（例：平成 12 年度；800 千円、平成 13 年度；500 千円）

- ・ 平成 12 年度、インタラクシオンデザインワークショップ、富士通株式会社、岡本誠、300 千円。
- ・ 知的クラスタ創成事業「札幌 IT カロツェリアの創成」構想、分担者：17 名（本学）北大、札幌高専等との共同研究（20 名）、研究経費（平成 14 年度：47,000 千円）
- ・ 知的クラスタ創成事業「札幌 IT カロツェリアの創成」構想、分担者：17 名（本学）北大、札幌高専等との共同研究（20 名）、研究経費（平成 15 年度 50,000 千円）
- ・ 知的クラスタ創成事業「札幌 IT カロツェリアの創成」構想、分担者：17 名（本学）北大、札幌高専等との共同研究（20 名）、研究経費（平成 16 年度：50,000 千円）

- 科学研究費補助金, 非視覚モダリティによる「直感」のインタフェース、代表：岡本誠、参加者数：4名、研究経費（平成15年度2,100千円）
- 科学研究費補助金, 非視覚モダリティによる「直感」のインタフェース、代表：岡本誠、参加者数：4名、研究経費（平成16年度1,000千円）
- 科学研究費補助金 基盤 B, CyARM 非視覚的モダリティを用いた空間印象認識装置の研究、代表：岡本誠、参加者数：4名、研究経費（平成17年度4,900千円）
- 科学研究費補助金 基盤 B, CyARM 非視覚的モダリティを用いた空間印象認識装置の研究、代表：岡本誠、参加者数：4名、研究経費（平成18年度2,600千円）

4) その他（特許、内地研究（学内共同研究は除外）および在外研究歴と成果など特記すべきこと。本項目は平成12-15年度に限定しない。）

- 特許申請：出願番号/特願 2004-35239, 名称/感覚代行装置
- 特許申請：出願番号/特願 2005-25452, 名称/感覚代行装置
- 特許申請：出願番号/特願 2005-099913, 名称/共同注視検出装置
-

2 教育業績

1) 教育負担の実態（複数教員で担当する科目の場合は、貴方の分担分のみ）本項目は時間割に含まれた教科（補講・補習など教室で行なったものは含む）を調査の対象としております。従って、〇〇研究会、〇〇同好会など、各教員室他で行なったものは、対象外とします。試験やレポートなどの採点時間も除外します。

例：

科目名（講義・演習・実習・補講の別）、単位数・必修/選択の別、担当教員数（単独の場合は不要）

& 実施期間（平成12年度前期、あるいは平成13年10-11月）、実施コマ数（休講しても補講で補えば算定する）、補講をしなかった休講回数（例：実施13コマ、休講2コマ）

\$ 実働時間数（全て、実時間合計(推定)値をお願いします）、演習などは一コマ1.5時間を超えていると思われるので、そのような場合は、たとえば一コマ2.2時間などと算定してください（例：実働22.5時間）

% 受講登録学生数（例：45名）、平均的出席者数（例：38名；初めは40名、終りは25名など）、単位認定（合格）者数

註：本項目はできるだけ正確をお願いしたいですが、概数でも結構です 記述がない場合は0と判断します

1. 現代デザイン論（講義、2単位、選択、教員数：7）

実施期間：平成12年度後期、実施14コマ、休講1コマ、実動時間：21時間、受講者130、平均出席者数：100、合格者数：90

実施期間：平成13年度後期、実施14コマ、休講1コマ、実動時間：21時間、受講者160、平均出席者数：100-110、合格者数：90

実施期間：平成 14 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：21 時間、受講者 155、
平均出席者数：125、合格者数：100
実施期間：平成 15 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：21 時間、受講者 160、
平均出席者数：130、合格者数：110
実施期間：平成 16 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：21 時間、受講者 150、
平均出席者数：125、合格者数：110
実施期間：平成 17 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：21 時間、受講者 150、
平均出席者数：125、合格者数：110
実施期間：平成 18 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：21 時間、受講者 135、
平均出席者数：105、合格者数：100

2. システム情報科学概論（講義、2 単位、必修、教員数：50）

実施期間：平成 12 年度前期、実施 3 コマ、実動時間：1.5 時間、受講者 250
平均出席者数：230、合格者数：
実施期間：平成 13 年度前期、実施 3 コマ、実動時間：1.5 時間、受講者 250
平均出席者数：230、合格者数：
実施期間：平成 17 年度前期、実施 1 コマ、実動時間：1.5 時間、受講者 250
平均出席者数：230、合格者数：
実施期間：平成 18 年度前期、実施 1 コマ、実動時間：1.5 時間、受講者 250
平均出席者数：230、合格者数：

3. システム情報科学実習 I（講義・演習、2 単位、必修、教員数：3）

実施期間：平成 14 年度前期、実施 30 コマ、実動時間：45 時間、受講者 13
平均出席者数：13、合格者数：13
実施期間：平成 15 年度前期、実施 30 コマ、実動時間：45 時間、受講者 16
平均出席者数：16、合格者数：16
実施期間：平成 16 年度前期、実施 30 コマ、実動時間：45 時間、受講者 15
平均出席者数：15、合格者数：15
実施期間：平成 17 年度前期、実施 30 コマ、実動時間：45 時間、受講者 11
平均出席者数：11、合格者数：11
実施期間：平成 18 年度前期、実施 30 コマ、実動時間：45 時間、受講者 11
平均出席者数：11、合格者数：11

4. システム情報科学実習 II（講義・演習、2 単位、必修、教員数：3）

実施期間：平成 14 年度後期、実施 30 コマ、実動時間：60 時間、受講者 13
平均出席者数：13、合格者数：13
実施期間：平成 15 年度後期、実施 30 コマ、実動時間：60 時間、受講者 16
平均出席者数：16、合格者数：16
実施期間：平成 16 年度後期、実施 30 コマ、実動時間：60 時間、受講者 15
平均出席者数：15、合格者数：15
実施期間：平成 17 年度後期、実施 30 コマ、実動時間：60 時間、受講者 11
平均出席者数：11、合格者数：11
実施期間：平成 18 年度後期、実施 30 コマ、実動時間：60 時間、受講者 11
平均出席者数：11、合格者数：11

5. ユーザ・センタード・デザイン（講義、2 単位、選択）

実施期間：平成 14 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 34
平均出席者数：33、合格者数：34

実施期間：平成 15 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 30
平均出席者数：30、合格者数：30
実施期間：平成 16 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 27
平均出席者数：27、合格者数：27
実施期間：平成 17 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 29
平均出席者数：29、合格者数：29
実施期間：平成 18 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 31
平均出席者数：31、合格者数：30

6. ユーザ・センタード・デザイン（演習、2 単位、選択）

実施期間：平成 14 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 34
平均出席者数：33、合格者数：34
実施期間：平成 15 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 30
平均出席者数：30、合格者数：30
実施期間：平成 16 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 27
平均出席者数：27、合格者数：27
実施期間：平成 17 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 29
平均出席者数：29、合格者数：29
実施期間：平成 18 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 31
平均出席者数：31、合格者数：30

7. 情報デザイン特論（講義、2 単位、選択）

実施期間：平成 15 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 26
平均出席者数：20、合格者数：20
実施期間：平成 16 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 28
平均出席者数：22、合格者数：22
実施期間：平成 17 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 25
平均出席者数：20、合格者数：20
実施期間：平成 18 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 28
平均出席者数：23、合格者数：20

8. 情報環境構築演習（演習、2 単位、選択、教員数 2）

実施期間：平成 15 年度前期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 10
平均出席者数：6、合格者数：6
実施期間：平成 16 年度前期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 20
平均出席者数：18、合格者数：18
実施期間：平成 17 年度前期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 16
平均出席者数：11、合格者数：10
実施期間：平成 18 年度前期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 11
平均出席者数：11、合格者数：11

9. 情報デザインシステム特論（大学院講義、2 単位、選択）

実施期間：平成 15 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 5
平均出席者数：5、合格者数：5
実施期間：平成 16 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 23
平均出席者数：20、合格者数：20

実施期間：平成 17 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 21
平均出席者数：20、合格者数：20
実施期間：平成 18 年度後期、実施 15 コマ、実動時間：40 時間、受講者 3
平均出席者数：3、合格者数：3

2) 成績評価方法（その方法を具体的に記載・学生（社会）が納得するような具体的説明。）
また、複数の教員で担当する科目の場合は、取りまとめの方法についても記述してください。

- 1.現代デザイン論（平成 12 年度～）：オムニバス形式の授業後レポート 3、期末試験 7 の比率で得点を合算。
- 2.システム情報科学実習 I 及び II（平成 14-18 年度）：レポート、授業参加度、プレゼンテーション、最終成果などを総合的に評価した。
- 3.ユーザ・センタード・デザイン講義及び演習（平成 14-18 年度）：企画書、調査計画書、ポートフォリオ、最終報告書、プレゼンテーションなどを総合的に評価した。
4. 情報デザイン特論（平成 15-18 年度）、講義、発表、ディスカッション及び最終レポートなどを総合的に評価した。
5. 情報環境構築演習（平成 15-18 年度）、講義、発表、ディスカッション及び最終レポートなどを総合的に評価した。
6. 情報デザインシステム特論（平成 15-18 年度）、デザインワーク、発表、ディスカッション及び最終レポートなどを総合的に評価した。
- 7.情報デザインシステム特論（平成 16-18 年度）、講義、発表、ディスカッション及び最終レポートなどを総合的に評価した。

3) 講義方法など改善への努力（FD 関連の講演会などの聴講回数、教育内容とそれらの効果について貴方が行われた事柄・目標を具体的に記述して下さい）。

- 1.現代デザイン論（平成 18 年度）：オムニバス形式の欠点として、授業内容の一貫性が保てないことがある。18 年度は、話の流れに戸惑う状況では進行役の私が注釈をするなど工夫をした。授業の評価は概ね好評であった。
- 2.システム情報科学実習 I 及び II（平成 18 年度）：「学習者の自主性」を引き出すことに苦心した。
- 3.ユーザ・センタード・デザイン講義及び演習（平成 18 年度）：ユーザ視点の設計方法を身につけるよう指導した。特に批判的に問題を発見する目を養うこと、発散した意見のまとめ方に注力した。18 年度は特に、試験的にシナリオ法を取り入れた。
4. 情報デザイン特論（平成 18 年度）：学生の発表方法の改善（身近な事例の発掘）。
5. 情報環境構築演習（平成 18 年度）：インクルーシブデザインの手法を取り入れた。フィール

ドサーベイを実施し、問題領域の深い考察ができた。

5. 情報デザインシステム特論（平成 18 年度）：情報デザインの文献（情報デザイン原論）を輪読。

4) その他（上記以外に特記すべきことがありましたら、簡潔かつ具体的に、箇条書きなどで記述してください。特に、貴方が作られたシラバスと現在教務委員会で検討されている（コース別）講義内容・目標、あるいは JABEE などとの関連、並びに貴方が担当されている科目の位置付けなどについてご意見があれば記して下さい。また、本学は教員の専門分野が多岐にわたっているため、相互理解を目的としたコース特有の問題点や、皆さんの教育に対する抱負などを記述して戴いても結構です。）

3 大学の管理運営

各種委員会（委員長・委員、クラス担任、学習指導・生活指導、クラブ活動の顧問等の実績（具体的に記述してください、できれば実働延べ時間数など）、その他。

<14 年度>

- ・将来検討委員会、委員
- ・自己評価委員会、委員
- ・産学連携委員会、委員
- ・大学院委員会、委員
- ・クラス担任（1-H）
- ・クラブ活動（写真部、ゴルフ部）

<15 年度>

- ・将来検討委員会、委員
- ・就職委員会、委員
- ・大学院委員会 委員
- ・クラブ活動（写真部、ゴルフ部）

<16 年度>

- ・広報委員会 委員長
- ・パンフレット WG リーダー
- ・就職委員会 委員
- ・大学院委員会 委員
- ・CIO 委員
- ・クラス担任

- ・ クラブ活動 (写真部)

<17年度>

- ・ 広報委員会 委員長
- ・ 昇任推薦委員会 委員長
- ・ パンフレット WG リーダー
- ・ 就職委員会 委員
- ・ 大学院委員会 委員
- ・ CIO 委員
- ・ クラス担任
- ・ クラブ活動 (写真部)

<18年度>

- ・ 施設委員会 委員長
- ・ 広報委員会 委員
- ・ 就職委員会 委員
- ・ クラス担任
- ・ クラブ活動 (写真部)

4 その他

資格 (技術士など)、地域への貢献 (地域自治体審議会、委員会等の役員、委員。地域との共同研究・技術相談。公開講座・出前授業・市民向け講演) あるいは提言・御意見など

<平成 14 年度>

- ・ 財団法人画像情報教育振興協会 委員
- ・ 函館地域物産評議会 委員
- ・ 市民講演:「心の地図」、講演、函館からトラス事務局、平成 14 年 3 月

<平成 15 年度>

- ・ 財団法人画像情報教育振興協会 委員
- ・ 函館地域物産評議会 委員

<平成 16 年度>

- ・ 財団法人画像情報教育振興協会 委員
- ・ 函館地域物産評議会 委員

<平成 17 年度>

- ・ 財団法人画像情報教育振興協会 委員
- ・ 函館地域物産評議会 委員

<平成 18 年度>

- ・ 函館市都市景観賞選考委員会 委員長
- ・ 函館地域物産評議会 委員